

# 採石場のヘレニズム

—前3世紀エジプト領域部の文化変容をめぐって—

周 藤 芳 幸

## 1 はじめに

プトレマイオス朝による統治の確立と地中海に面する首都アレクサンドリアの文化的・経済的發展は、ナイルの流域に広がる伝統的なエジプト世界に新たな対応を迫ることになった。在地社会のエジプト人は、(軍事)入植者として、あるいは新たな統治システムの末端を担う役人として続々と到来したギリシア系の人々と、日常生活のさまざまな場面で交渉することを余儀なくされるようになったのである。

たしかに、エジプトへのギリシア人の本格的な流入の画期が、前332年のアレクサンドロス大王によるエジプト「解放」よりも、むしろ前664年のサイス朝の成立にこそ求められるべきことは、近年の研究が強調する通りである<sup>1</sup>。ヘロドトスの伝えるところでは、サイス朝初代の王となったプサンメティコス1世は、エジプト統一にあたってギリシア人とカリヤ人の傭兵を用い、後に彼らにデルタ東部のペルシオン河口に近い場所に土地を与えて居住させた<sup>2</sup>。ヘロドトスは彼らの居住地を「陣営」と呼んでいるが、近年の考古学的調査は、ミグドルやテル・デフネなどでこの「陣営」にあたるのではないかと考えられる軍事拠点の存在を明らかにしている。また、周知のように、サイス朝最後の王となったアマシスは、この傭兵たちの子孫をメンフィスに移して親衛隊に抜擢するとともに、当時の都であるサイスにより近いナウクラティスにギリシア人ための交易拠点を設けさせた。19世紀末のフリンダース・ピートリーによる発掘で名高いナウクラティスの遺跡は、その後の調査によって現在ではアマシス王の時代よりも古く前7世紀後半に遡るものであることが判明しているが、いずれにしてもサイス朝の時代にエジプト人とギリシア人との関係がきわめて密接なものとなったことは確実である。

しかし、それにもかかわらず、前4世紀末の東地中海情勢の変動とプトレマイオス朝の成立がエジプト在地社会にもたらしたインパクトは、きわめて大きかったと考えられる。というのも、サイス朝の時代のギリシア人入植者が、あくまで限定された土地に居住する傭兵集団、もしくは彼らを主たる取引の目的として到来する交易商人たちであって、在地社会のエジプト人にとっては一定の距離を置くことの可能な存在だったのに対し、プトレマイオス朝の時代のギリシア人たちの多くは、在地社会のエジプト人たちの暮らしに直接関わる存在として彼らの前にその姿を現したからである。それでは、エジプト領域部におけるギリシア人とエジプト人の遭遇は、いった

いどのような文化変容を在地社会にもたらしたのであろうか。また、何を手がかりとすれば、そのプロセスを時系列的に再構成することが可能となるのであろうか。

この問題に関して、2003年にプトレマイオス朝エジプトが専制的な中央集権国家であったとする通説を根底から批判する著書を公にしたJ. マニングは、「プトレマイオス朝エジプト史を研究する歴史家は、多くのテーマに関して時系列に沿った変化という歴史学のもっとも根本的な問題を扱うことができていない」と指摘している<sup>3</sup>。プトレマイオス朝の歴史が静態的なものとしてとらえられがちな理由は、何よりもその研究がギリシア語パピルス文書という単一の史料類型のみに過度に依存する形で進められてきたことと無関係ではない。プトレマイオス朝時代のパピルス文書は、空間的にはアレクサンドリアから遠くはなれたファイユームや上エジプトに偏っており、年代的には前三世紀中頃と前二世紀末に集中している。そのため、これまで歴史家がパピルス文書からこの時代の社会を復元しようとする際、「エジプト社会の斉一性と停滞性」というメタナラティブに頼らざるをえなかったのも当然であろう。明らかに、いまプトレマイオス朝史研究に求められているのは、パピルスから導かれた伝統的な社会像を批判的に検討するための新たな類型の史料を収集することであり、その点において、これまでほとんど行われてこなかったプトレマイオス朝の考古学は、将来の研究の進展に向けて大きな可能性を秘めている。

本論文では、このような認識のもとで、前三世紀に大量の石灰岩が採掘されていた中エジプトの採石場に残されたギリシア語およびデモティックで記されたグラフィティを考古学的に分析することにより、領域部におけるヘレニズム、具体的には採石場においてギリシア語が記録用の言語としての地位を獲得していく過程を時系列的に明らかにする<sup>4</sup>。永続性を重んじた古代エジプト世界において、石材を用いた巨大なモニュメントの建造は王権や神官団にとって自らの権力を可視化するもっとも有効な手段であり、古王国時代のピラミッドから新王国時代のカルナック大神殿にいたるまで、そのようなモニュメントの例には事欠かない。プトレマイオス朝の時代にも、領域部ではエドフのホルス神殿を筆頭に大規模な石造神殿が続々と建設されており、現代の都市によって覆われているために詳細は依然として不明であるものの、首都アレクサンドリアの建設にあたって膨大な石材が必要とされていたはずである。採石場のグラフィティは、そのような石材を切り出す現場に残された貴重な未刊行の一次史料であり、そこから窺われる文化変容の一断面は、在地社会のヘレニズム現象に貴重な光を投げかけるものといえよう。

## 2 ザウィエト・スルタン採石場とその調査

古代エジプト世界における二つの重要な建築資材は石灰岩と砂岩であるが、石灰岩が主として古王国時代から新王国時代の初め頃までピラミッドに代表される各種の建築物に用いられたのに対して、砂岩は新王国時代からローマ時代にかけてとりわけ大規模な神殿建築に用いられていたとされる<sup>5</sup>。この二種類の石材は産地も異にしており、石灰岩の採石場が現代の中エジプト、と

りわけミニアからソハーグまでの200kmほどの間に集中的に分布しているのに対して、砂岩の採石場の分布域はそれより南のスーダンに至る上エジプトに広がっている。アコリス考古学プロジェクトが調査の中心的な対象としているアコリス遺跡は、ちょうど石灰岩の採石場が集中的に分布する地域のほぼ北端にあたっており、遺跡の周辺の岩石砂漠上には様々な時代に採石作業が行われた痕跡が生々しく残されている。

アコリス遺跡周辺に広がる採石場の存在は、1997年から2001年にかけてアコリス遺跡都市域北端部でヘレニズム時代の石材加工場が発掘された際にアコリス考古学プロジェクト関係者の関心を集めるようになり、堀賀貴を中心とする建築史のチームによるサーベイと測量が開始された。これと並行して、西本真一と遠藤孝治は、ドイツのクレム夫妻がアコリス遺跡の南約12kmに位置するザウイエト・スルタン古代採石場で報告していた<sup>6</sup>、表面にファラオ立像を素描した巨石ブロック（以下「巨像」）に注目し、2004年からその本格的な建築学的調査を始め、それは2006年以降も遠藤によって継続された。その結果、様式的な根拠から「巨像」を新王国第18王朝のアメンヘテプ三世のものとするクレム夫妻の推測とは裏腹に、「巨像」底部の横穴天井面に朱筆で描かれた文字にはギリシア語アルファベットが含まれること、すなわちこの「巨像」は紛れもなくプトレマイオス朝の時代の王像であることが確認された。このような経緯を受けて2005年に着手されたのが、筆者らによるザウイエト・スルタン古代採石場のグラフィティ調査である<sup>7</sup>。

ザウイエト・スルタン古代採石場は、カイロの南約250km、中エジプト屈指の大都市ミニアからナイルを越える橋を渡り、東岸をさらに南へ5kmほど進んだ地点で岩石砂漠の縁から北西に向かって延びる谷あい広がっている（Fig.1）。ミニアの対岸では、現在岩石砂漠上を開発して人工的な都市（新ミニア）の建設が進んでいるが、採石場はこの都市の外周を画する道路とナ



Fig. 1 ザウイエト・スルタン採石場の全景（北東から）

イルの沖積平野との間に位置している。このあたりの沖積平野には独特のドーム状の天井部を持つムスリムの墓が密集しており、ナイルと岩石砂漠が接するその南端部には、第3王朝時代の小規模なピラミッドなどで知られるザウリエト・スルタン（もしくはザウリエト・マエティンないしザウリエト・アムワト）遺跡が荒廃した集落跡をさらしている。この遺跡から北西方向を望むと、垂直の崖が不規則に切り立つ斜面が目にとまるが、これが古代の採石場である。

採石場は、岩石砂漠上の「巨像」の西側から沖積平野まで、長さ約1kmにわたってほぼ南東に続いており、北西部が平坦に広がっているのに対して、南東部は深い峡谷状の地形を呈している。北西部には、石材を豆腐状に切り出そうとした痕跡などが残っているが、新ミニアに近いために大量の廃棄物が投下されており、古代のグラフィティはごく一部でしか確認することができない。これに対して、南東の峡谷状の部分では、複雑な採石状況を留める東側斜面と、水平方向への試掘の跡である横穴ギャラリーを中心に、グラフィティが比較的良好な状態で残っている。ただし、後代の採石によってプトレマイオス朝時代の採石跡が破壊されてしまったと考えられる箇所もあり、グラフィティは谷全体にわたって確認されるわけではなく、とりわけ谷の東側では上部（ローマ時代の採石跡が広がる現地表面の直下）と底部（谷のもっとも低い部分）に集中している。

グラフィティの調査にあたっては、現在の景観の特徴に従って谷全体を複数のセクション（区）に分割し、それらに対してほぼ北から南にアルファベットによる名称を与えた（Fig. 2）。ただ

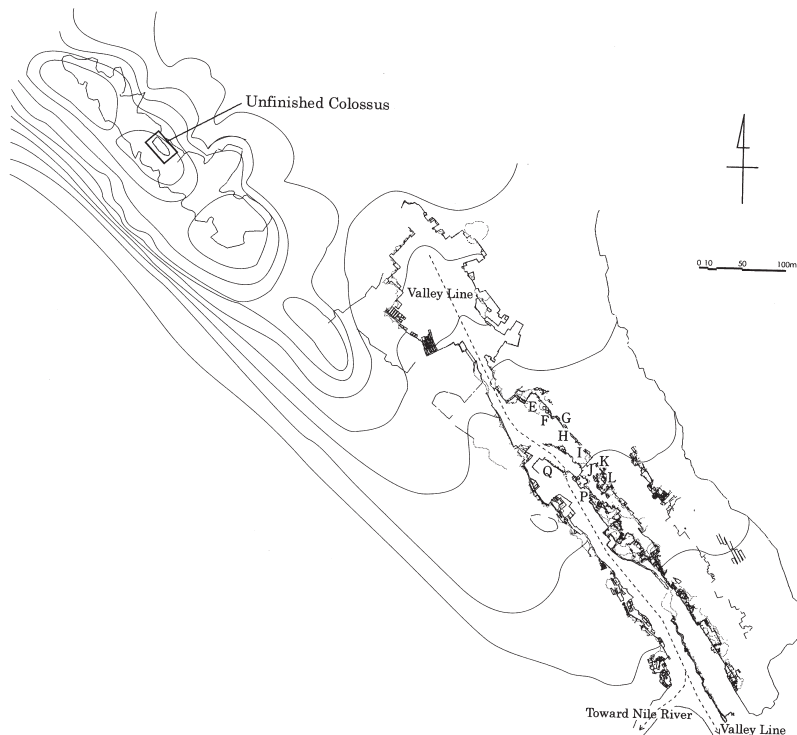


Fig. 2 ザウリエト・スルタン採石場のプラン（Preliminary Report Akoris 2006, fig.13による）

し、西側の横穴ギャラリーのように、調査の過程で新たにグラフィティの存在が明らかになった箇所については、後からセクション名を付したため、結果的にセクション名は必ずしも北から南という順序には完全には従っていない。また、上述したように採石場の北西部ではグラフィティの残存状況が良好ではないため、AからCまでは欠番としてある。これらのセクションを識別するにあたっては、基本的には一続きの壁、もしくは一つの横穴ギャラリーに、一つのセクション名を与えることとした。採石場にはいくつもの大きな自然の亀裂（フィッシャー）が走っており、古代の採石作業はその部分を避けるように進められたため、セクションを相互に隔てているのはこうして掘り残された部分であることが多い。セクションの設定はあくまで記録上の便宜のために行ったものであるが、後述するようにこれらは実際の採石作業の単位としても機能していたものと考えられる。

### 3 グラフィティの基本構造

ザウリエト・スルタン古代採石場のグラフィティは、後述するように細部においてはセクションごとに相違点もあるものの、全体としてはきわめて規則的な書き方がされている。また、谷の上部（E-L, S, T, Uの各区）では、ギリシア語のグラフィティは例外なくほぼ同内容を記したデモティックのグラフィティに並置されている。ここではまず、L11+12（ギリシア語）とL9（デモティック）のグラフィティ（Fig. 3）の訳を示しておく。

#### [L11+12]

治世35年 エペイフ月 21日

（ΛとEの組文字） トテウス

5 1/2, 5 1/2, 1

#### [L9]

ペレト4月 シェムウ1月、シェムウ2月

（？） ジェフティウ

5 1/2 x 5 1/2 x 1

このように、ギリシア語のグラフィティは、常に英語の大文字エル（L）をした治世年記号で始まり、年数、月の名称、そして横線の下に日を示す数字が続いている。これに対して、併記されたデモティックのグラフィティでは、この例のようにしばしば治世年が省略されることがあり、月名についても連続する三つの月名が並べられている場合がある。その際、その最後の月名がギリシア語の月名と一致する（エペイフはシェムウ2月）ことから、内田と高橋はデモ



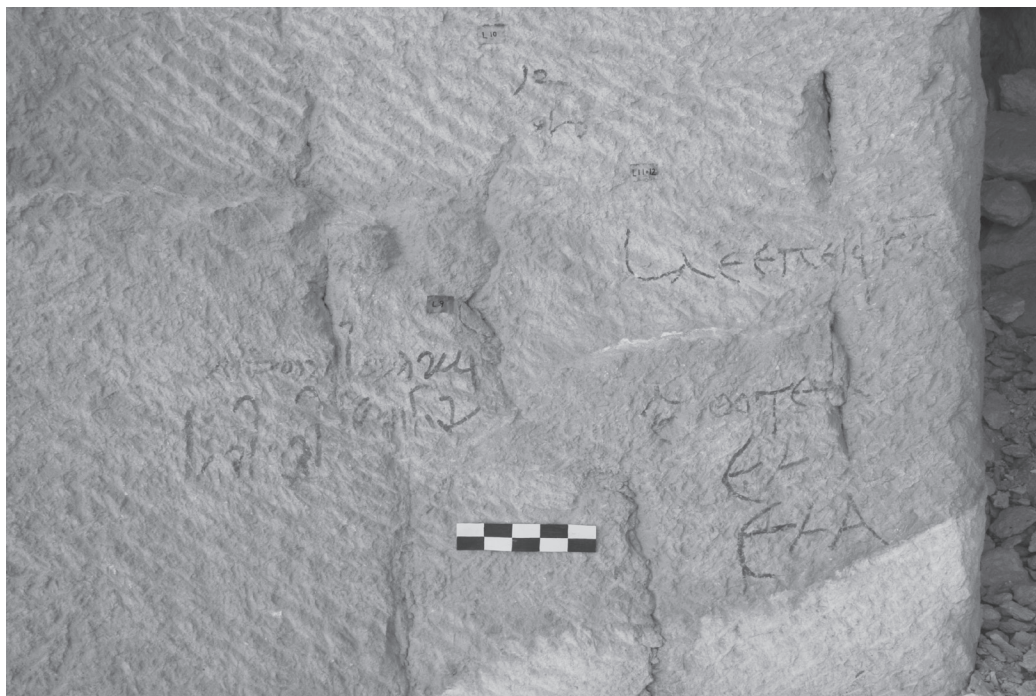


Fig. 3 グラフィティ L11+12 (右), L9 (左)

ティックのグラフィティに現れる月名が採石作業の「期間」を示しているのに対し、ギリシア語のグラフィティの月名はその「完了日」を示しているのではないかと推測している<sup>8</sup>。しかし、月名が常に三つに限定されていること、また次の例のように単一日付を表記するデモティックのグラフィティも存在することから、筆者はこの仮説にはさらに検討の余地があるのではないかと考えている。

多くの場合、日付の後は改行され、次の行には人名が現れる。この例では人名は属格で示されているが、これはL区に特有の記法であり、他のセクションでは次の例のように主格で書かれるのが一般的である。人名には、この例のように特殊な記号が冠されたり、父称が添えられたりすることもある。この例のように、エジプト人の名前はしばしばギリシア語に意識されている（トテウスという名は明らかにトト神に由来するものであるが、この神の名はエジプト語でジェフティである）が、本来のギリシア人の名前がデモティックで表記される際には、単に音を移しているだけのケースが一般的である<sup>9</sup>。この例と次の例に共通して現れるΛとEを上下に組み合わせた記号は、おそらく「自由石工（エレウテロラトモス）」の省略形であり、興味深いことに、ザウエト・スルタン古代採石場のグラフィティでは、ほとんど常にエジプト人名とともに現れている。

さらに改行されて、その下には一連の数字が二段にわたって現れるが、この数字については、対応するデモティックのグラフィティでは一段で書かれているため、その対応関係から、下、上、

右の順で読むべきことは明らかである。また、デモティックの場合は、横一列に数字を並べる都合から、三つの数字の間にはこれらを積算することを示す記号が挿入されることが多い。このような三つ組みの数字は「巨像」の底部でも観察されており、遠藤は詳細な建築学的分析にもとづいて、それらが一定の掘削量を体積として示している可能性が高いこと、デモティックでは三つの数字が順に幅×奥行×高さの順で記され、対応するギリシア語では幅と高さが左から順に書かれ、その上に奥行が書かれていること、基本となる単位（ほとんどのグラフィティで末尾に現れる1の実寸）が王朝時代のロイヤル・キュービットに近い約53.7cmであることを明らかにしている<sup>10</sup>。遠藤によれば、三つ組みの数字に関するこの解釈の妥当性は、「巨像」底部ばかりではなく、ザウイエト・スルタン古代採石場のセクションGでも立証されるという<sup>11</sup>。

次の例では、上記の各項目に関するギリシア語とデモティックの対応がより明瞭であり、壁面上で両者はほとんど一体のものとして表記されている（Fig. 4）。

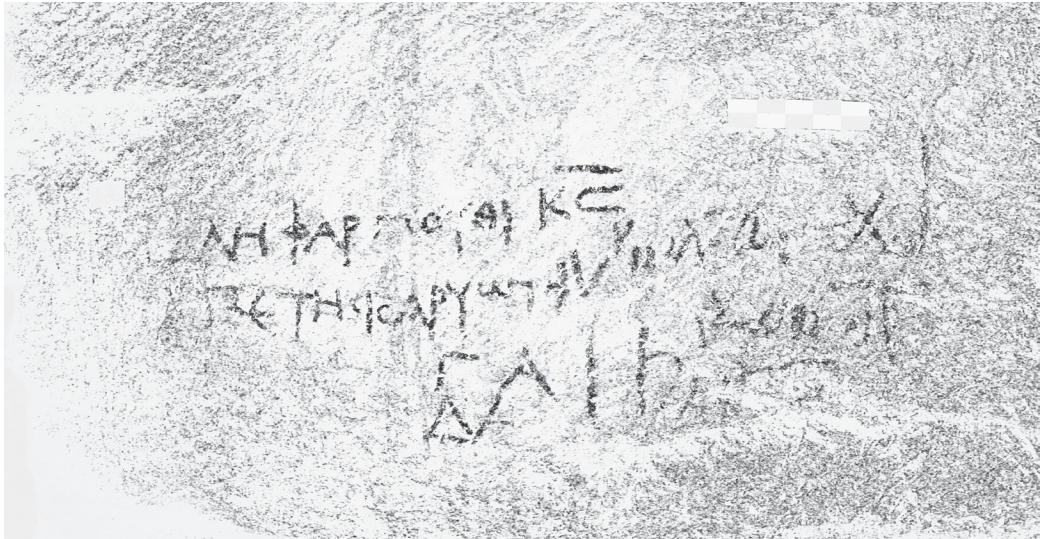


Fig. 4 グラフィティ F36

[F36 左半分]

治世38年 ファルムーティ月 26日

( $\Lambda$ とEの組文字) ハリュオーテースの子ペテーシス

4 1/2, 3, 1

[F36 右半分]

治世37年 シェムウ4月 26日

パ・・・アセト

4 1/2 x 3 (x) 1

この例では、先の例とは異なってデモティックでも治世年と日付が明記され、数字も完全に一致している（ファルムーティはシェムウ4月）。ところが、一見して分かるように、治世年はギリシア語が38年であるのに、デモティックでは37年となっている。実は、この奇妙な現象は、デモティックがエジプト暦で表記されているのに対して、ギリシア語が財政暦で表記されていることに起因している。プトレマイオス朝のエジプトでは、エジプト暦、財政暦、マケドニア暦の三つの暦が並行して使われていた<sup>12</sup>。このうち、エジプト暦と財政暦は基本的に同一であるが、前者がトト月から始まるのに対して、後者はメケイル月から始まっていた。すなわち、エジプト暦と財政暦で治世年が一致するのはトト月からテュビ月までの五ヶ月間だけであり、残りの期間については常に財政暦の治世年はエジプト暦よりも一年先を示すことになる。この例の場合、エジプト暦の治世37年ファルムーティ月が財政暦では既に治世38年に入っているため、ギリシア語部分では治世38年と表記されたものと考えられる。このような表記法は、ザウィエト・スルタン古代採石場のグラフィティに一貫して観察されるものであり、ギリシア語とデモティックによる併記が単なる対訳だったのではなく、それぞれ異なる目的を念頭において行われていたこと、ことギリシア語グラフィティについては治世年を財政暦で表記する必要性があったことを示唆している。

これまで述べてきたのは、谷の上部で観察される主として二言語併記のグラフィティの特徴であるが、谷の底部（M, P, Qの各区）では状況が異なる。というのも、基本的に谷の底部ではギリシア語のグラフィティしか確認されないからである。次の例は、谷の底部のもっとも奥（北）の東壁にあたるQ区のギリシア語単独のグラフィティである（Fig. 5）。

#### [Q5]

治世25年   メケイル月   12日

バルメニスコス

6,3 5/6, 縦線, キュービット (?), 1/3

この例に見られるように、1行目と2行目には、谷の上部のグラフィティと同様、治世年、月日と人名が記されているが、Q区のグラフィティでは先に見たような1で終わる三つ組みの数字以外にも、より複雑な配列の数字が記されており、その中にはしばしば通常キュービットを示す際に使われる記号も含まれている。現段階ではこれらの数字をどのように読むのかは明らかではないが、このような数字の表記法の相違は、谷の上部のグラフィティと底部のそれとの間には、一定の時期差があることを示唆している。



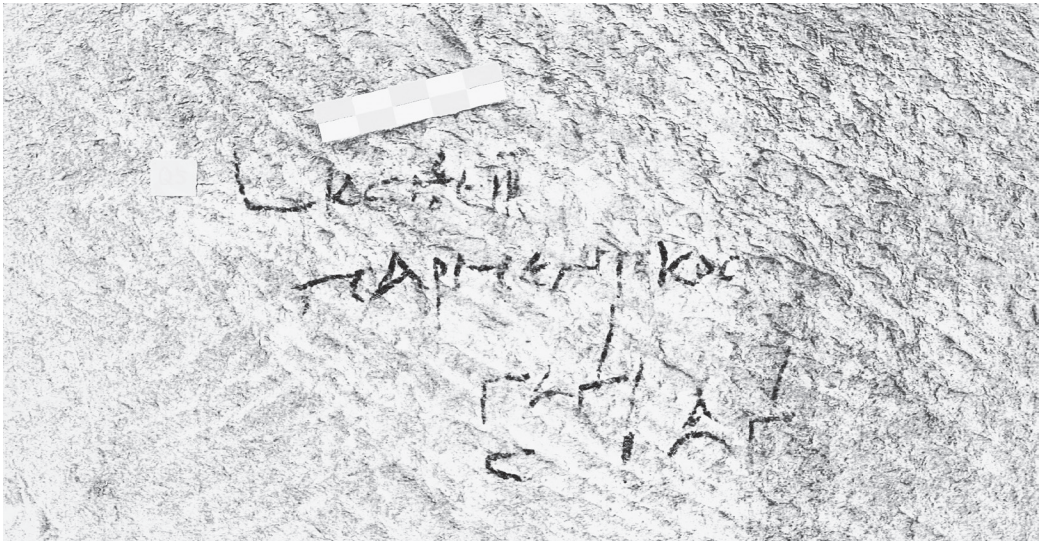


Fig. 5 グラフィティ Q5

#### 4 グラフィティの年代

ザウリエト・スルタン古代採石場の壁や横穴ギャラリーの天井部に残された膨大な数のグラフィティは、いったいつ書かれたものであろうか。この問題を考えるための手がかりは、いうまでもなくグラフィティが言及する治世年にある。

この採石場の調査を開始した2005年には、谷の上部の三つのセクション（J, K, L）でグラフィティの実測を行ったが、その結果、これらのセクションには第34年から第36年までの治世年を記したグラフィティが分布していること、またその北側のセクションには治世38年に言及するグラフィティが存在することが判明した。そのため、筆者は当該年度の概報において、以下のような推測を行った。まず、ギリシア語とデモティックとが併記されていることから、これらのグラフィティがプトレマイオス朝期に書かれたことは確実である。しかも、グラフィティに言及された治世年からは、これに対応する王の治世が少なくとも38年以上に及んでいたことは明らかである。ところが、プトレマイオス朝にはこの条件を満たす王は二人しかいない。それは前三世紀の2世フィラデルフォスと、前2世紀の8世エウエルゲテス2世である。一方で、この採石場から遠くないアクリス遺跡の調査では、前2世紀に地中海系のアンフォラが大量に搬入されていたことが判明しており、それを促したのはこの地域からの加工石材のアレクサンドリアへの搬出であったと考えられる<sup>13</sup>。従って、より蓋然性が高いのは、前3世紀のプトレマイオス2世というよりは、むしろ前2世紀のプトレマイオス8世であろう<sup>14</sup>。

しかし、結論から述べれば、この推測は誤りだった。というのも、その後の調査によって、谷の上部に分布するグラフィティの年代は、南（J, K, L区）から北（E, F, G, H, I区及び横穴

ギャラリーのU, S区)に向かって治世34年から治世39年まで続き、そこから治世2年以降に転じていることが明らかになったからである<sup>15</sup>。疑いもなく、これらのグラフィティの治世年が言及している王は、治世39年目の終わり近くに没したプトレマイオス2世と、その後継者であるプトレマイオス3世と考えられる<sup>16</sup>。それでは、谷の底部については、どうだろうか。

谷の底部では、沖積平野に近い南側のM区から始まり、その北のP区にかけて断続的にギリシア語のグラフィティが確認されている。そこに現れる治世年からは、M区については治世10年に、またP区については治世4年と16年に操業していたことは分かるものの、これだけではそれらの治世年を特定の王と結びつけることはできない。しかし、北端のQ区からは、興味深いデータが得られている。ここでは、壁の高い位置に治世22年もしくは23年のグラフィティがあり、現地表面に近い低い部分には、縦の朱線に相互に隔てられる形で、治世25年のグラフィティが並んでいる。ところが、そのもっとも奥まった北東端からは、治世2年のグラフィティが見つかったのである。明らかに、このセクションは治世25年頃まで統治した王の時代に採掘されていたが、問題はそこの二人の王が候補となりうることである。一人は、治世26年に没したプトレマイオス3世、もう一人は治世25年に没したプトレマイオス5世である。それでは、この二人のどちらかに絞る手がかりはあるだろうか。

この点に関して、2009年度にQ区北東端のトレンチ壁から発見された二つの隣接するグラフィティは、決定的な重要性を持つと考えられる (Figs. 6, 7)。

#### [Q29]

治世2年 ファオフィ月 (?) 7日

#### [Q30]

治世26年 ファオフィ月 7日

ホロスの子オンノフリス

4 1/2, 2 1/3, 5/6

Q30に治世26年が言及されていることは、問題の王がプトレマイオス3世であったことを示している。しかし、これらのグラフィティから得られる情報は、それにとどまるものではない。Q30の読みについては問題ないが、Q29で月名を示している組文字は、判読が容易ではない。右上の湾曲した線を $\beta$ の一部とみなすならば、月名はテュビ以外にはありえないが、それでは治世年記号の右側に残る縦線（その上端にはわずかに横線の痕跡が残る）の説明がつかない。もし、この縦線も組文字の一部だとすると、これは縦に長い $\Phi$ を元にした組文字（ファオフィ、ファメノト、ファルムーティ）ということになる（ $\Phi$ の中心部分は剥落したと考えられる）。ここで注目されるのが、隣のQ30の月名がファオフィであり、日付も同一の7日である点である。確かに、





Fig. 6 グラフィティ Q29

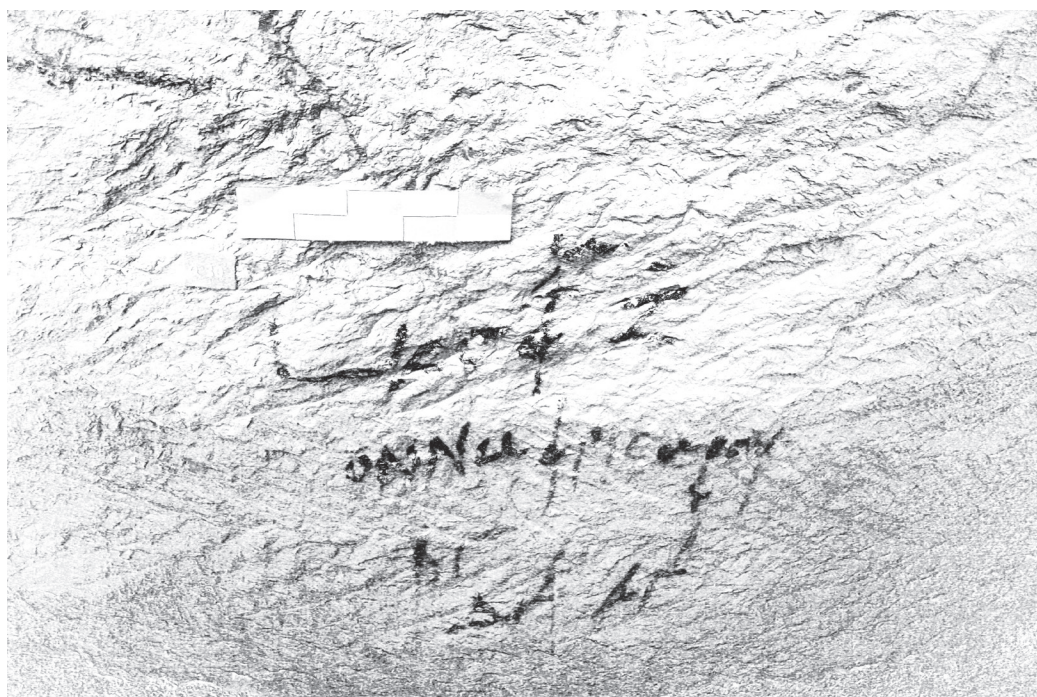


Fig. 7 グラフィティ Q30

日付の一致は偶然かもしれないが、この二つのグラフィティがほぼ同一のレベルに近接して書かれていること、Q29に治世年と日付だけしか書かれていないことは、Q29がQ30の書き直し、具体的には王の崩御の報による治世年の訂正である可能性を示唆しているのである。

プトレマイオス3世が没したのは、遅くとも前222年の12月、すなわち治世26年のファオフィ月もしくはハテュル月のことと想定されている<sup>17</sup>。Q29がQ30の書き直しであるとするれば、ここではプトレマイオス3世の治世26年ファオフィ月7日（前222年11月23日）付で書かれたグラフィティが、その直後に治世2年の日付に訂正されたことになる。もちろん、訂正は治世2年ではなく治世1年とされるべきだが、何らかの理由で書き手は治世2年と誤解したのであろう。この推測が正しければ、これらのグラフィティはプトレマイオス3世時代のもっとも遅い史料ということになる。いずれにしても、これらのグラフィティは、谷の底部の北端が、プトレマイオス3世の末年から4世の初年にかけて採掘されていたことを明らかにしたといえる。

以上の所見をまとめるならば、ザウリエト・スルタン古代採石場では、その上段がプトレマイオス2世時代に、その下段がプトレマイオス3世時代に操業されていたことがほぼ確実である。谷の底部の北端から石材をナイルに搬出するためには、それより南側が先に採掘されていなければならないことから、M区のグラフィティに現れる治世8年や治世10年、P区のグラフィティに現れる治世16年などは、いずれもプトレマイオス3世の治世年を指しているものと考えられる<sup>18</sup>。これほど深く広大な谷が前3世紀後半のわずか数十年間に掘り抜かれたという仮説は意外な感を与えるかもしれないが、F区南端に治世38年ファルムーティ月23日から29日にかけてのグラフィティが存在するのに対し、30m近くも隔たったF区北端に同じ月の26日と27日のグラフィティが残されている状況からは、採石作業がある程度の規模で同時進行していた様子が窺われ、このような仮説の妥当性を裏付けているように見える。

## 5. 時系列上の変化

史料としてのグラフィティの特性は、何よりもそこに治世年が表記されているため、きわめて微細な文化変容の過程を追うことができる点にある。それでは、ザウリエト・スルタン古代採石場の場合、前3世紀中頃に始まるグラフィティの様式的な変化は、どのような文化変化を物語っているのだろうか。

ザウリエト・スルタン古代採石場でこれまでに記録されているもっとも古いグラフィティは、F区のテラスの上に横転している大型の石材に書かれた長文のデモティックの例である。これは、複数の日付に言及する三行からなっているが、冒頭には治世32年という治世年が明記されている。原位置の状況を復元することは困難であるが、これと並んでこの長さのテキストに相当するギリシア語のテキストが書かれていたとは考えにくいことから、この段階ではグラフィティはデモティック単独で記されていた可能性が高い。



これに続く治世34年から治世36年のグラフィティは、自然の亀裂が走っているために掘り残された高い突出部の南に位置するJ区からL区で確認されている。ここでは、同一壁面上にギリシア語とデモティックのグラフィティが併記されているが、上述したようにデモティックのグラフィティは一貫して治世年を欠いており、日付についても連続する複数の月名が列挙されるのみで日が特定されていない。ギリシア語のグラフィティでは、人名が必ず属格で表記されているのがこれらのセクションでのみ見られる特徴となっている。人名としては、デメトリオスやアポロニオスといったギリシア人名が、ペトシリスのようなエジプト人名と並んで現れている。J区では下から石材を切り出した結果、天井面がオーバーハングする形で残っているが、そこに残されているグラフィティは、すべてデモティックのものばかりである。

治世37年のグラフィティは少ないが、治世38年の二言語併記グラフィティは、突出部の北のI区から北に向かって広く分布している。ギリシア語グラフィティの表記法の変化として注目されるのは、月名すべてを書き下すのではなく、綴りの冒頭の二つないし三つのアルファベット（たとえばパウニ月の場合にはΠΑΥ）を組み合わせで一文字にした組文字が導入されるようになることである。G区からE区まで、すなわち谷の上部東側北端のグラフィティに現れる人名は圧倒的にエジプト人名であり、そのほとんどが上述したΛとΕを上下に組み合わせた記号を伴っているばかりでなく、何人かの場合にはさらにΠΑを入れ子にした記号やアंक状の記号が人名の前に置かれている。

治世38年と治世39年の二言語併記グラフィティは、上部西側に掘り込まれた横穴ギャラリーであるU区天井にも残されている。ところが、G区からE区とまったく同じ時期のものであるにもかかわらず、ここでは判読可能な8人の名は、フィリポスやアッタロスといったマケドニア系のギリシア人名となっている。

同じく西側の横穴ギャラリーであるR区では、狭い天井面にギリシア語とデモティックのグラフィティがぎっしり書き込まれており、それらの対応関係を探ることは難しいが、年代としては治世2年もしくは3年のものばかりである。さらに南の西側中腹に位置する横穴ギャラリーのS区でも、状況はほぼ同一である。

谷の底部に移ると、もっとも南側に位置するM区では、垂直の壁に書かれた治世8年もしくは10年のギリシア語グラフィティの間に、デモティックのグラフィティも散在している。ところが、その北に続くP区では、確認された46点のグラフィティのうち、デモティックを伴っているものは2例に限られる。さらに北に進んだ谷の最奥部のQ区にいたっては、もはやデモティックのグラフィティはまったく現れない。グラフィティはすべてギリシア語で書かれるようになったのである。

## 6. 結論と展望

ザウリエト・スルタン古代採石場におけるグラフィティの時系列的な変化からは、以下の点を指摘することができる。第一に、採石場に残されたグラフィティからは、この採石場が少なくともプトレマイオス2世時代の末年から4世時代の初年に及ぶ30年あまりの間に操業していたことが判明した。実際の操業の開始時期がグラフィティの示す年代よりもどれだけ古いのかは不明であるが、谷の全体を通じて確実にこの期間から外れる年代を示す痕跡が乏しいことから、概ねグラフィティの示す年代幅は操業期間と重なっているものと考えられる。

第二に、この間を通じて、グラフィティを記すための言語は、デモティック単独使用からデモティックとギリシア語の併用へ、ついでギリシア語単独使用へと推移したことが明らかになった。ザウリエト・スルタンでは、デモティック単独使用の段階があったことは状況証拠からの推測にとどまらざるをえないが、さらに南のデイル・アル＝バルシャでは、ベルギー隊によってデモティックだけが用いられた前4世紀の採石場が調査されている<sup>19</sup>。朱線と文字によって採石場の作業を管理するアイディアは王朝時代に遡るものであるが、この伝統は前一千年紀に入っても在地の採石場で連綿と継承され、ヘレニズム時代にまで至ったものと考えられる。

このように、ザウリエト・スルタン古代採石場のグラフィティは、採石場という在地社会の末端においても、前3世紀の半ばから後半にかけてギリシア語の使用が急速に進展したことを証立している。そのプロセスの詳細は不明であるが、この変化を促進した要因の一つが、採石場における労働形態にあったことは確かであろう。上述したように、グラフィティに現れる人名には、セクションによって差異はあるものの、ギリシア系の名前とエジプト系の名前がともに含まれている。おそらく史料にラトモイ（石工）として現れる集団に相当すると考えられる彼らが、自ら手を下して採掘に携わる労働者だったのか、あるいはその区域の採掘作業の責任者だったのかは定かではない。しかし、グラフィティを二言語で併記する習慣が一定期間続いたこと自体が、採石の現場において、ギリシア語とエジプト語をそれぞれの母語とする人々が共同して働いていた状況が現出していたことを如実に物語っている。在地社会へのギリシア語の浸透は、プトレマイオス朝による上からの政策などではなく、このような在地社会の状況から必然的に生じたものだったのである。それでは、採石場で働いていた彼らは、いったい何者だったのか。

プトレマイオス朝時代の鉱山労働はしばしば戦争捕虜や囚人、奴隷などによって行われたとされているが、ロストフツェフも指摘するように、在地住民の生活圏に近い採石場では、そのような者たちの使用は一般的でなかったと考えられる<sup>20</sup>。この点についても、採石場のグラフィティからは、きわめて興味深い仮説を導くことができる。

これまでの調査によって、暫定的にはあるが、ザウリエト・スルタンでは月名を読み取ることのできるギリシア語のグラフィティが108点確認されている。その月ごとの分布を調べると、もっとも多いのはパウニ月とエペイフ月（およそ7月下旬から9月下旬）で、それぞれ16点ずつ

が見つかっている。これらの月に先行するパコン月にも13点、さらにその前のファルムーティ月にも13点が存在する。ところが、逆にこれらの月の直後にくるメソレ月のものは5点しかなく、その次のトト月にいたっては1点も見つかっていない。グラフィティに記された日付が採石の行われた日付であるという確実な証拠はないが、両者がほぼ対応するものであったとすると、採石場での作業は春先（テュビ月）から活発化してナイルの氾濫期にその頂点に達し、ナイルの水が引くと激減したことになる。このパターンは、いったい何を反映しているのであろうか。

もし採石作業が専門の石工集団によって行われていたのであれば、このような季節による大きな変動はありえないであろう。明らかに採石作業は農閑期にもっとも盛んに行われていたのであり、それはとりもなおさず採石場の労働者の少なくとも一部が在地のエジプト人農民やギリシア人入植者であったことを示唆しているのである。

擲筆にあたり、ザウリエト・スルタン古代採石場のグラフィティの史料価値を指摘することで、今後の研究への展望に代えたい。第一に、これらの史料は、これまで圧倒的にパピルスやオストラカに依拠する形で進められてきたヘレニズム時代のエジプト在地社会研究にとって、新たな情報源となることが期待される。とくに、二言語で併記されたグラフィティの年代がプトレマイオス2世の時代に重なることは、ゼノン文書に代表されるギリシア語パピルス史料との相互検証が可能になることを意味している。第二に、グラフィティの世年を手がかりとすることで、本論で述べたような細かい時系列上の変化を追うことが可能になる。これは、とりわけ在地社会の文化変容を考察する際に、グラフィティが考古学的証拠を補完する機能を果たしうることを意味している。第三に、これらの史料が採石場の壁面や天井面というコンテキストを伴っていることから、建築学的な知見と総合することによって、ギリシア人とエジプト人とのダイナミックな相互交渉の実態を浮き彫りにする可能性が拓ける。グラフィティの内容の分析はまだその緒についたばかりであるが、以上の諸点を勘案するならば、そこからプトレマイオス朝エジプト史の再構築に資する成果が得られるであろうことは確実であろう。

※ 本稿は、2008年5月11日に日本西洋史学会第59回大会（島根大学）において、また2010年8月19日に国際パピルス学会第26回大会（ジュネーヴ大学）において、それぞれ高橋亮介氏（現ロンドン大学キングズカレッジ客員研究員）とともに行った口答発表を踏まえ、その後の研究成果と考察を加えて作成したものである。高橋氏、ならびに本調査に絶大な支援をいただいているアコリス考古学プロジェクト団長の川西宏幸氏（筑波大学教授）と同プロジェクトのメンバー、とりわけデモティック文書についてご教示を賜っている内田杉彦氏（明倫短期大学）には、この場を借りて厚くお礼申し上げたい。なお、本稿は平成22年度科学研究費補助金（基盤研究B）「ヘレニズム時代エジプト領域部における文化交流と二言語併用社会の研究」による研究成果の一部である。

<sup>1</sup> J. Manning, *The Last Pharaohs: Egypt Under the Ptolemies, 305-30 BC*, Princeton 2010, 22-24.

<sup>2</sup> Hdt. II. 152-4.

<sup>3</sup> J. Manning, *Land and Power in Ptolemaic Egypt: The Structure of Land Tenure*, Cambridge 2003, 15.

<sup>4</sup> 以下、採石場の壁や天井に朱筆で書かれた文字列を、単数複数にかかわらずグラフィティと呼ぶ。また、特に断りのない場合には、治世年はギリシア語のグラフィティに現れる財政暦のそれを指す。

<sup>5</sup> P.T. Nicholson and I. Shaw, *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge 2000, 6.

- <sup>6</sup> R. Klemm and D. Klemm, *Steine und Steinbrüche im alten Ägypten*, Heidelberg 1993, 94-97.
- <sup>7</sup> 予備的な考察としては、Y. Suto, Text and Context of the Greek Graffiti at the Ptolemaic Quarry of Zawiet Sultan in Middle Egypt, *SITES: Journal of Studies for the Integrated Text Science*, 4-1, 2006, 1-18を参照。
- <sup>8</sup> *Preliminary Report Akoris* 2005, 22-23.
- <sup>9</sup> たとえば、ディオドロスというギリシア人名は、対応するデモティックのグラフィティでは *Tytrs* と転記されている。*Preliminary Report Akoris* 2005, 22.
- <sup>10</sup> 遠藤孝治「未完成巨像の地下で発見された文字と赤線に関する建築学的考察」『サイバー大学紀要』第1号（2008）33-49.
- <sup>11</sup> *Preliminary Report Akoris* 2009, 21-23.
- <sup>12</sup> P.W. Pestman, *A Guide to the Zenon Archive (P.L. Bat. 21)*, Leiden 1981, 215-219.
- <sup>13</sup> 周藤芳幸『古代ギリシア 地中海への展開』京都大学学術出版会（2006）第10章、H. Kawanishi & Y. Suto, *Akoris I: Amphora Stamps*, Kyoto 2005.
- <sup>14</sup> *Preliminary Report Akoris* 2005, 22.
- <sup>15</sup> 治世1年のグラフィティがないのは、治世1年が実質二ヶ月足らずだったことによるのであろう。
- <sup>16</sup> プトレマイオス3世が即位したのは、カノーポス決議によればマケドニア暦のディオス月25日（前246年1月27日）とされており、これはプトレマイオス2世が逝去した日でもあると考えられている。W. Huss, *Ägypten in hellenistischer Zeit 332-30 v. Chr.*, München 2001, 331.
- <sup>17</sup> Huss, op.cit., 380, n.3.
- <sup>18</sup> 問題はP区に頻出する治世4年であるが、これはプトレマイオス4世時代の拡張と考えてよいであろう。
- <sup>19</sup> H. Willems *et al.*, Preliminary Report of the 2003 Campaign of the Belgian Mission to Deir al-Barsha, *MDAI Ab. Kairo* 62, 2006, 307-339.
- <sup>20</sup> M. Rostovtzeff, *The Social and Economic History of the Hellenistic World*, vol.1, Oxford 1941, 298.



**Abstract**

## Hellenism and Quarry in Ptolemaic Middle Egypt

Yoshiyuki SUTO

Since 2005 the author has been conducting archaeological investigations at the open-air limestone quarry at Zawiat al-Sultan in Middle Egypt on the east bank of the Nile, where an impressive Ptolemaic quarry is located. These surveys led to the discovery of vast number of Greek and Egyptian demotic, often bilingual, graffiti left on the walls and ceilings of the quarry. The chronological sequence of graffiti on the upper part of the valley indicates that these sections were quarried under the last years of Ptolemy II and the beginnings of the reign of his successor Ptolemy III. As for the lowest level of the quarry, the sequence of graffiti strongly suggests that the activities here should be dated to the last years of Ptolemy III and the early years of Ptolemy IV. This chronological observation of the graffiti reveals that the phenomenon of linguistic Hellenization seems to have advanced in relatively short time in third-century BCE Middle Egypt. Although we must appreciate the long process of cultural contact between Greeks and Egyptians beginning with the Saite restoration, the pace of cultural change in the local society seems to have been not so much constant as highly variable, and there must have been several cataract where Hellenization progressed rather drastically.